

共同炊事の黎明 (2)

——愛知県共同炊事場と埼玉県川越市栄養食配給所の比較——

中 野 典 子*・馬 場 景 子**

The Dawn of the Cooperative Cooking (2):
The Comparison of Cooperative Cookhouses between Aichi and Saitama Prefecture

Noriko NAKANO and Keiko BABA

はじめに

工場食共同炊事場は、日本の近代化の副産物として、かつ近代化を支えた工場労働者の食と健康という必須条件を満たす社会的な意義を持つ施設として発展していった。しかし時代と社会の急速すぎた推移により、その実態は明らかになっていないのが実状である。近代工場食共同炊事場の始祖は、実は愛知県にあったといって過言ではない。尾張地方と三河地方に日本の工場食共同炊事場のオリジンといえる共同炊事場が存在した。尾張地方の織物地帯尾西の工場食共同炊事場に関しては先行研究^{1), 2), 3)}でその独自性と工場給食配給において全国の日本近代化の先駆的な存在の一つであることなどを明らかにした。

この当時の共同炊事場設立は、各工場の食事の格差が、労働力確保に支障をきたしたことに大きく起因している。また大正5年（1916）に施行された日本で最初の労働法である工場法成立の基にある労働争議の争点でもある労働条件の健全化希求も遠因になっていることが予想される。また工場労働者の栄養に関しては、愛知県警察部工場課内愛知工場会が発行し、大正7年（1918）に初版が出版され、大正13年（1924）に二版を出版している岡崎亀彦著『工場食飲食物献立表』から、労働衛生の全国への先駆として愛知県が、労働者の福利厚生、そして栄養という西洋の科学的な概念の導入を試みた萌芽の地であることを再認識することが可能である。

栄養学という見地から、栄養の概念が一般に普及し、浸透していくのは大正14年（1925）に、国立栄養研究所の初代所長であった佐伯矩が佐伯栄養学校を設立し、栄養士を共同炊事場に置くことを制度化する試行を行なう昭和初期以降である。それ以前は、摂取カロリーのみが論じられていた。栄養の概念を普及するために、鋳物産業の中心地であった埼玉県川口市が佐伯矩の「栄養の改善を行うことによって、健康の増進、経済の安定、道徳

* 生活科学部 食品栄養学科

** 日本福祉大学非常勤講師

の高揚に大きな貢献ができる」という提唱を受け入れ、埼玉県工業懇話会川口支部が栄養食配給所の設立に踏み切ることになり、昭和9年（1934）に埼玉県川口市の栄町に栄養食配給所が設立される。埼玉県の栄養食配給所が日本で最初の共同組合方式による炊事場であるといわれているが、この解釈は、佐伯矩の意見を取り入れ栄養士を共同炊事場に置くセンターとしての位置づけという点においては正しいのであるが、しかし組織立った共同炊事場という観点から見た場合、愛知県の尾張地方尾西の起共同炊事場と三河地方の蒲郡郡三谷築地の三河織物共同炊事所の存在が埼玉県川口市の栄養食配給所に先立つ組織だった共同炊事場であることを、明言することが可能である。この根拠となる主たる資料は、前述した岡崎亀彦著『工場食飲食物献立表』と、昭和13年（1938）に出版された『工場食の改善と工場栄養食共同炊事場』である。しかし後者の資料には、三河地方の二箇所の共同炊事場、三河織物共同炊事所と蒲郡町共同炊事場の名前の記載はあるが、尾西の起共同炊事場の記載が見られない。このことは産業衛生協会への加盟・非加盟によって記載の有無が左右されていると推論できる。

本稿では、以上の資料的根拠をもとに2006年上半期に調査を行った二箇所、愛知県蒲郡市三谷築地21番地に存在し⁴⁾、現在も運営されている三河織物共同炊事（現三河栄養共同組合）と埼玉県川越市松江町2丁目12番地4に存在し、川越市の文化財になっている旧栄養食配給所に焦点を当て日本の近代化の発展過程において工場食共同炊事場が果たした役割の一端を考察し、論じるものとする。

Ⅰ．愛知県蒲郡市三谷町築地の共同炊事場

前述した『工場食の改善と工場栄養食共同炊事場』⁵⁾には、愛知県三河地方の2箇所の共同炊事場の名が記載されている。一つは、三河織物共同炊事場（所在地：宝飯郡三谷町築地）、二つ目は、蒲郡町共同炊事場（所在地：宝飯郡蒲郡町）である。本章では前者の三河織物共同炊事場に焦点を当て共同炊事場の運営経緯を概観する。

往時の三河の繊維産業の隆盛を示す資料を以下に記す⁶⁾。

【資料1】

三河織物の大半の勢力を占める三谷の機業家の趨勢の概略を述べるならば、三河織物の沿革にもある如く、三谷は昔より機場として世に知られている。明治30年頃まではこの附近の町村の畑にも綿や藍が栽培され、それがお婆さんや娘さんたちによって糸繰車でびいびいと糸に紡がれて、手織機（俗にチャンカラ機）でちゃんこくちゃんこくと布に織られ、1日に一人で二反から三反位織ったものである。明治31年に103件もあった織屋が豊橋銀行の破綻と、32、3年の不況によって34年には24軒に減った。37年から40年頃にかけてチャンカラ機が足踏機に更り、大正時代に入って力織機が出始めた頃、時恰も欧州戦乱の余波で好景気襲来し、又々機業家が増加し現在の如き大部分が優秀なる豊田式織機を使用し、一人の工女に5、6台も織機を受持たせ、1日で1人30反位も織らせて、1日に三谷中で1万反も生産される様な状態となったのである。蒲團綿、綿英ネルの如きは日本での産地として斯界に認められ、東京・大阪が主なる販路先である。時代の進運に伴い近時大中織機工場の漸次増加しつつある傾向は、三河織物の転換期を意味するものである。（下線筆者）

当時の共同炊事場に関しての資料には⁷⁾、次のような記述がある。

【資料2】

三河織物、否三谷町に世に誇る一つの社会施設がある。それを三河織物共同炊事所という。この共同炊事所は大正7年12月、舞田壽三郎、竹内林平、竹内長蔵、二村喜助、平野利作、内田廣治の諸氏が発起人となり、

1. 吾等同業者を募め共同炊事場を設置し一般工場の食事を供給するを以て目的とす。

1. 出資額は織機1台一口とし割宛つるものとす。

1. 場所、名称、資本金、設備、会計、経営方法は総会に於て決定す。

の創設主旨を作成し出資者を得て創立したもので、大正8年4月8日に事業開始をなし、資本金1万9千9百80円也（一口十円、出資者38名）である。大正11年7月の満3周年記念祝賀会には、時の知事川口彦治氏の参列があり盛会を極めた。次いで山脇春樹知事の視察もあって、面目を施したことが数々ある。

昭和4年3月末現在の配給高は、1食事時に850食にして、好況時代の最高配給高は2000食までであったと。設備としては河野式炊爨竈を使用し、1日1人につき金25銭位にて上り、この食事は三谷や蒲郡の一部の織物工場の職工は勿論、主人公も食べれば家族も食べるところから職工間に食物の不平がなく、然も経済的な所から社会施設として認められている。昭和4年5月4日小幡知事の来臨を得て乃木山美養公園に於て創立10周年記念祝賀会を挙行し、祝賀会を催した。（下線筆者）

『工場食の改善と工場栄養食共同炊事場』に記載されている共同炊事場と同一なものである根拠は、資料2の「三河織物共同炊事所」の名称と設立年月日の一致から明らかである。その配給内容は、資料1では大正期に力織機が導入され、概算しても工女だけでも300人強が工場に勤務していたことになり、また資料2では、昭和4年（1929）の時点では1食事時に850食、好況時代の最高配給高は2000食に達していた。炊飯釜に関しては、当時最新とされ、大量の炊飯を可能にした河野式が使用されている。また「職工間に食物の不平がなく」は、初期共同炊事場設立にとっての重要要因である。

愛知県蒲郡市三谷町築地の共同炊事場は現在も営業を続けている^{8),9)}。所在地は当時のままであるが（写真1）、建て直されて現在駐車場となっている場所に当時の炊事場が存在した（写真2）。敷地面積は、1,742.96m²（519.35坪）である。設立当初から伝わるものとして金庫に当時の名称が書かれている（写真3）。また三河栄養食共同組合の沿革は次の通りであり、名称の変改が時代の推移を反映している。



写真1



写真2



写真3

大正 8 年	三河織物共同炊事所
昭和17年12月 4 日	社団法人栄養食共同組合
昭和18年 4 月16日	社団法人三河栄養食配給所（改称）
昭和20年 4 月 5 日	社団法人三河航空食兵器食料配給協会（改称）
昭和20年 8 月30日	社団法人三河栄養食配給所（改称）
昭和42年 8 月 1 日～現在	三河栄養食共同組合（継承）
（認可年月日不明）	
（昭和61年 4 月 社団法人三河栄養食配給所解散・清算終了）	

II. 埼玉県川越市旧栄養食配給所

現在は、旧栄養食配給所は川越市の文化遺産となっている。同様に文化財となっている明治43年（1911）に建築された旧川越織物市場（写真4）の敷地内に隣接して建てられている。栄養食配給所は織物市場の一角に後年建設されたものであると考えられている¹⁰⁾。営業の期間は昭和9年（1934）から昭和20年（1945）までである。さらに建物に書かれている栄養食という文字（写真5）からも、昭和9年に川口市内で最初の栄養食配給所が建てられたほぼ同時期に、川越市に共同炊事場が作られた可能性が高い。しかし当該建造物が建設された時点から栄養食配給所の名称が付けられていたかどうかは不明である。この施設に関しては、増築等を繰り返すことにより、かなり複雑な形態を示している。先行研究で対象にした起共同炊事所や三河織物共同炊事所に比べるとかなり狭い厨房構造となっているが、昭和9年操業開始時には8箇所の工場に1日3食で152人分の主食と副食を配給していた。さらに昭和13年（1938）には19工場、408人分を配給した記録が残っている¹¹⁾。昭和初期当時の共同炊事場の様子を知るためにも重要な産業遺構である（写真6）。



写真4



写真5

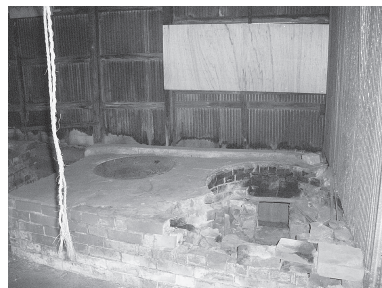


写真6

ま と め

工場食共同炊事場の推移に関して、愛知県蒲郡市三谷築地の三河織物共同炊事所（現三

河栄養食共同組合)と埼玉県川越市の旧栄養食配給所を比較することにより次のような考察が可能である。

1. 愛知県の工場食共同炊事場は、大正期に動機機を導入により、工場の規模が大きくなるに従い多く労働力が必要になり、結果として工場間の食事の格差が労働力確保に支障をきたすことから建設された。この時点では、摂取カロリーのみに焦点が当てられていた。
2. 栄養食配給所という名称に関しては、三河織物共同炊事所が昭和17年(1942)12月に名称を社団法人栄養食共同組合に改称していることを考えると、栄養食の冠が付くのは戦時中厚生省の推奨により社団法人組織となることを契機にしているようである。川越市の旧栄養食配給所の名称に関しても文化財指定に関する報告書では、栄養食配給所の看板の文字は昭和14年(1939)となっていることを考慮すると、栄養という名称の普及は昭和14年前後である可能性が高い。これに関しては栄養食普及のセンターとなった川口市の調査を進めて行くことにより栄養の概念の普及のあり方を知る上でも、設立当初から栄養食配給所の名称が付けられていたかの調査を行ない確認する必要がある。

今後の共同炊事場の研究に関しては、愛知県尾張地方、三河地方、埼玉県川口市、川越市、並びに『工場食の改善と工場栄養食共同炊事場』に記載がある地域の共同炊事場の調査を行っていかねばならないと考えている。さらに栄養食と名が付いた以降の食事内容を探る必要がある。これにより、近代工場食への栄養の概念の浸透度合いを、俯瞰することが可能になるはずである。

謝辞

貴重な資料を提供頂いている愛知県一宮市尾西の鈴木貴詞氏、林喜代氏、稲沢市の原幸子氏、蒲郡市三河織物工業協同組合専務理事 森田克己氏、三河栄養協同組合副理事長 飯島卓氏、埼玉県川越市広報委員会委員の藤井美登利氏、川越市役所文化財保護課の関係各位をはじめご協力いただいた多くの方々に深謝申し上げます。

注

- 1) 馬場景子、中野典子「栄養学から見た女工の食事」『ジェンダー研究』第2号、(財)東海ジェンダー研究所、平成11年(平成10年度研究助成対象論文)(法政大学大原労働問題研究所収蔵)。
- 2) 中野典子、馬場景子「工場法改正における食と健康関係書類の研究——大正12年と昭和4年の改正に伴う『献立予定表』の分析を中心として」(財)日本食生活文化財団、平成14年(平成13年度研究助成対象論文)。
- 3) 中野典子、馬場景子「共同炊事の黎明(1)——起共同炊事組合の成立と運営を中心に」『椋山女学園大学研究論集』第37号「自然科学篇」2006年。
- 4) 三河織物共同炊事場の存在は、名古屋文理大学社会人学生の前原幸子氏からの情報提供による。
- 5) 鈴木貴詞氏所有資料。
- 6) 『今昔の三谷』昭和4年発行、昭和49年(復刻)、愛知県郷土資料刊行会 pp. 115-116より引用。

- 7) 『今昔の三谷』 pp. 116-117より引用。
- 8) 「三河栄養食共同組合の沿革」より引用。
- 9) パンフレット「三河栄養食共同組合あんない」によると、組合の沿革と運営内容は次の通りである。「大正8年三河織物共同炊事所として設立され、当三河織物工場従業員の保険衛生、栄養、経済、親睦と5つの基盤にたった共同給食を推進し、途中昭和17年に社団法人三河栄養食配給所（戦時中厚生省の推奨により社団法人組織となる）と改称、戦前戦後を通じて常に集団給食の発展、職場の生産向上、健康管理等一貫して食生活改善の一翼を担ってまいりました。今日衛生面の強化並びに食生活の新時代に対処するため、昭和42年4月に共同組合を設立喫食者との心の通った納得のいくバランス給食をめざして今日に至っている。」
- 10) 旧栄養食配給所に関しては、川越市がこの建物群を文化財に指定するにあたり報告書が提出されている。川越市文化財審議委員である東洋大学工学部建築学科の浅井賢治氏によると、建物の建築年は不明だが、栄養食配給所の創立者の一員として業務に携わった坂根氏が昭和9年に当該地に転居した時点で共同炊事場の運営は開始されていたことになる。また昭和14年5月に提出された資料「建築届書」は増築建物の申請書で、添付資料に住居と作業所の案内図や建築図面などがあつたと報告している。
- 11) 川越市文化財資料。

参考資料

馬場景子、中野典子「栄養学から見た女工の食事」『ジェンダー研究』第2号、(財)東海ジェンダー研究所、平成11年（平成10年度研究助成対象論文）（法政大学大原労働問題研究所収蔵）

中野典子、馬場景子「工場法改正における食と健康関係書類の研究——大正12年と昭和4年の改正に伴う『献立予定表』の分析を中心として」(財)日本食生活文化財団、平成14年（平成13年度研究助成対象論文）

厚生省労働局労務課『工場食の改善と工場栄養食共同炊事場』昭和13年

農文協『埼玉の食事』昭和54年